

昭和

開館がもたらしたものの…

平成

津山文化センターは、今から 50 数年前、建築家・川島甲士の手によって設計され、昭和 40 年末に完成、翌年（1966 年）1 月 11 日に開館しました。

川島は、寺院など日本の伝統的な木造建築の軒の荷重を支えてきた「斗拱（ときょう）」と呼ばれる架構技術に着目。鶴山城址に隣接という立地の中で、「斗拱」を抽象化し、現代的な材料と解析技術によって再現、末広がりな鶴山城の石垣と見事に対比させました。

この建築設計に対して、第 8 回建築業協会賞（1967 年）はじめ、数々の賞を受賞し、50 年経った今も、建築設計を志す学生や国内外の設計技術者の見学訪問が後を絶ちません。

小さな願いから始まった建築構想

開館からさらに遡ること 10 年、キッカケは、当時の住民女性たちの「私たちが集まるところが欲しいね」という小さな願いからだったそうです。施設の恵まれない時代。文化の拠点が欲しいという夢は大きく膨らんでいきます。少しずつ気運が高まり、やがて多くの市民を巻き込んで大きな運動へと発展してきます。具体的な実現への取組は昭和 33 年に動き始めました。津山市議会で建設が議決されたのです。

当時の仮称は、「美術産業文化会館」でした。約 6 年間をかけて、入念な建設説明会、現地説明会、地質調査等が繰り返されました。そして、昭和 39 年 10 月 14 日ようやく起工式に辿りつきました。折しも、日本は東京オリンピック開催の真っ最中で大いに沸いていました。新会館建設にあたり、「この会館は、音楽、演劇、講演、

講座その他各種の集会と催しなど多目的に利用できる市民のための文化施設です」という看板が掲げられました。

総工費は当時の金額で約 2 億 8 千万円。そのうち、1 億 2 千万円は厚生年金保険積立金還元融資を受けまし

◀昭和 41 年 1 月 11 日付
津山朝日新聞



た。残りは、市民による寄付金、県からの補助金、市費によって賄われました。

そして、着工から 1 年 2 ヶ月。昭和 40 年 12 月末に「津山文化会館」（当時の名称）は完成したのです。

開館時の規模は、大ホールは 1,220 席の観客席を備えていました。（現在は 1,054 席）、また、会議室、展示館（展示ホール）、のほかに結婚式場、レストランを完備していました。

津山文化センターが落成し開館式を迎えたのは昭和 41 年 1 月 11 日。この時から、10 日間に渡る「こけら落とし」イベントが繰り広げられました。

翌 12 日は記念文化講演会を催しました。講師は、評論家・犬養道子、人気の美容体操研究家・竹腰美代子、後のノーベル賞作家・大江健三郎の 3 氏。

続いて「市民合唱祭」（13 日）「成人式」と「市民音楽祭」（15 日）。当時の人気テレビ番組の公開録画が 2 つ。NHK「それは私です」出演は、安西愛子、加藤芳郎、桂米丸、坪内ミキ子（17 日）。RSK「ゲーム・ゲーム・ショー」出演は、高橋圭三、スリーファンキーズ（19 日）。芸能祭（21 日）。公演のない日は、館内自由見学日としました。わずか 2 週間で入場者数は 3 万人を超えました。

津山に誇るべき文化の拠点が誕生したことにより、文化環境は一変、にわかに活気づきました。音楽の市民団体が次々と結成され、文化センターのステージに立つことが目標にされたのです。

同じ年の 4 月には作陽音楽大学が開校し、津山文化センターはそのホームグラウンドとしての役割を果たしてきました。

演劇の分野でも、まず、古くから盛んであった高校演劇をはじめとするアマチュア演劇の関係者が色めき立ち、ここを目標の舞台にします。

そして、文化の拠点ができたことで自信を持って、演劇に限らず、音楽、古典芸能など優れた舞台芸術を招聘できるようになりました。その受け皿として、津山市民劇場が誕生します。

高度成長期という時代背景と真新しいホール。会員数は着実に増え、公演企画もいいものを揃えることができました。また、公演を終えた、アーティストや役者の皆さんと会員がゆったりと交流することができた、和やかな時代でもありました。

演劇だけでも、文学座、俳優座、劇団民藝、前進座、劇団仲間、東京演劇アンサンブル…と、名のある俳優たちを抱える大手劇団が競うように、津山に安い公演料で来てくれました。夢のような時代でした。

ところが昭和も終盤に差し掛かると、少しずつ歯車が狂い始めます。